

たのしい たのしい 船穂校♪

倉敷市立船穂小学校 横山文朗

ごんぎつね

新美南吉の「ごんぎつね」の色は何色ですかと聞かれて、「葬列の白とひがん花の赤。」と答えられたら、その人は4年生の時にすぐれた国語の指導を受けています。「茶色」と答えたのでは国語になりません。

「兵十はぼろぼろの黒いきものをまくしあげて、こしのところまで水にひたりながら、さかなをとる、はりきりという、あみをゆすぶっていました。はちまきをした顔のよこっちょうに、まるいはぎの葉が一まい、おおきなほくろみたいにへばりついていました。」わたしは、ごんぎつねの話が好きです。「ひがん花が、赤いきれのようにさきつづいていました。」「ごんは、ふたりの話をきこうと思って、ついていきました。兵十のかげぼうしをふみふみいきました。」など情景と登場人物の心情の描写が巧みです。

作者の新美南吉は、現在の愛知県半田市に生まれました。「権狐」は小学校の教員をしていた時に書かれた作品です。昭和三十年ごろから国語の教科書に採択されるようになり、昭和五十五年からは、全国の四年生の教科書に採用されました。わたしは、子どもの時に習った記憶はありませんが、新採用の時から「ごんぎつね」は国語の教科書にありました。この作品を強く意識するようになったのは、「ごんぎつね」が人権教育の教材として広く用いられていたからでした。

「ごん、おまいだったのか。いつもくりをくれたのは。ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなづきました。」ごんの死という別れの場で、兵十はごんの思いに初めて気付きます。新美南吉の作品は、人間のやさしさを主題にしていながら、とても悲しくせつない作品が多いです。「牛をつないだ樁の木」の海蔵さんは日露戦争に行き帰ってきませんでしたし、「おじいさんのランプ」では、おじいさんは自分が売っていたランプをたたき割ってしまいます。「てぶくろを買いに」の子ぎつねは、人間につかまえられはしなかったけれど、母ぎつねは、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやき、やさしさについて懐疑的です。

物語文の指導法も以前とは変わっていて、描写を詳しく読むことはないようですが、読書の時間などを通じて物語文のすばらしさにふれさせてほしいと思っています。

